

記者提供資料
2026年(令和8年)3月19日
文化・スポーツ室歴史文化財担当 (担当：稲原・池田)
電話：078-918-5629 (内線：7221)

しょうきめん れんが
鍾馗面を描いた煉瓦の発見について

このたび、二見横河公園の煉瓦塀撤去に伴い、歴史文化財担当が煉瓦の選別調査を行ったところ、鍾馗面を刻んだ煉瓦が1点見つかりました。

鍾馗とは、中国に伝わる道教系の神のことで、日本では平安時代末頃から信仰がみられます。凶像を飾ることにより、疫病除け、魔除け、学業成就の効果があるとされています。

二見横河公園は、戦国時代から当地に住んでいた土豪の横河家の邸宅があったところです。屋敷の周りは当時、白壁で覆われていましたが、白い壁は城に見間違えられ海賊等から襲われる可能性があったため、塀を赤くしたという言い伝えがあります。ここから横河家は「赤壁さん」と呼ばれるようになり、地元でも親しまれていました。

旧横河邸の煉瓦塀は、横河家文書に収められている「家屋改修費帳」に明治39年(1906)3月末に「南側石垣周囲煉瓦塀」が落成したと記録されていることから、この時期に屋敷の周囲にめぐっていた土塀を煉瓦積にしたとみられます。横河邸は昭和55年(1980)頃まで使われていましたが、その後、昭和61年(1986)に煉瓦塀を含む約1,680㎡の土地を明石市に寄贈され、現在は二見横河公園として、市民の憩いの場となっています。

この煉瓦塀も近年、風化が進み、倒壊の恐れも生じてきたことから、公園・海岸課では、塀を解体し、新たな塀を設置することとなりました。

歴史文化財担当では、全体で約40,000個からなる煉瓦塀の解体に合わせて、約2,000個分の煉瓦の選別調査を行い、その結果、刻印等がある約1,000個の煉瓦を採取しました。

刻印は煉瓦の表面に押したものが多く認められましたが、中には裏面や表裏両面に押したものなどもあります。刻印の大部分は井桁状に2本の線を重ねたもので、やや菱形をしていることから、「菱井桁」と呼んでいるものが大部分でした。ただ、その周りに丸い型枠が残るもの、四角い型枠が残るもの、井桁の線の太さや長さ、形で複数ありましたが、これらはすべて大阪泉南地域の「貝塚煉瓦」製であることがわかりました。「貝塚煉瓦」は貝塚市南町に所在し、明治27年(1894)に株式会社となり、明治40年(1907)に大阪窯業に吸収合併され消滅しています。旧横河邸の煉瓦塀は合併される直前に製作されたものと考えられます。

収集した約1,000個の煉瓦は、現在、魚住文化財収蔵庫に保管しています。煉瓦を重ねる際に使われた砂などがついてのものもあり、現在水洗作業中です。今後、これらを詳細に調べていくと、煉瓦の刻印の種類によって、工場内での作業分担のあり方など、煉瓦製造にかかる工程がより明らかにされることが期待されます。

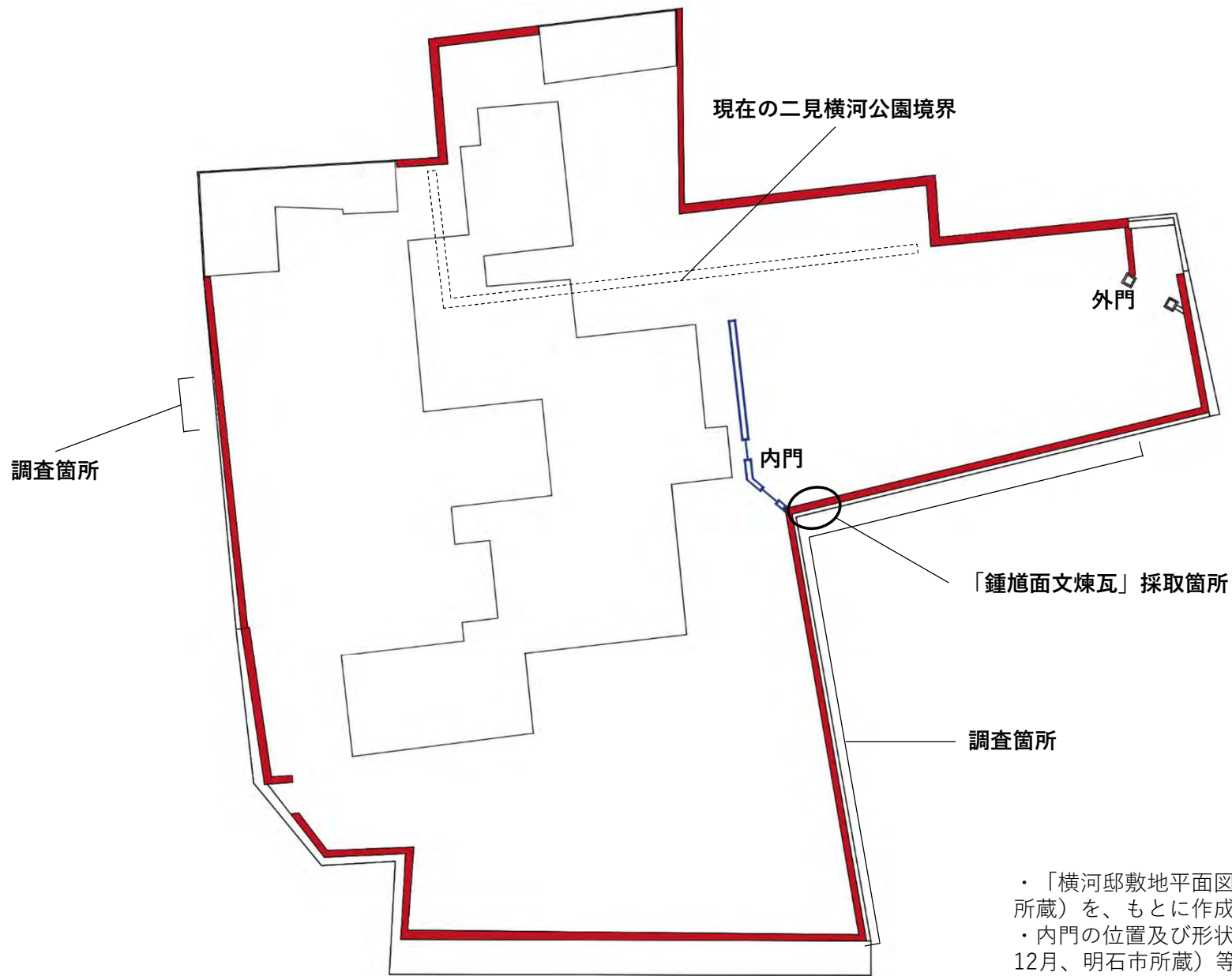
採取した煉瓦の中に、表面の一面全体を使い、ヘラ状工具で顔を描いた非常に珍しいものがありました。煉瓦は幅11cm、長さ23cm、厚さ6cmの一般的な煉瓦のサイズです。描かれた顔は、頬の輪郭の中に眉、目、鼻、口を描き、煉瓦の長辺角に刻みを付け、顎鬚を表現しています。吊り上がった目と髭の特徴から鍾馗の顔を描いたものと考えられます。

鍾馗は、関東地方では五月人形や掛け軸として室内に飾り、近畿地方では屋根の上に瓦として飾る場合が多くあります。

今回、鍾馗面を描いた煉瓦が発見された場所は旧横河邸の北東の鬼門に位置していることから、この煉瓦は、邸内に災いが入らないため特別に作り、入り口付近に設置したものと思われる。

鍾馗面を描いた煉瓦の類例はこれまでになく、今回の解体工事に伴う調査によってはじめて明らかになったものであり、煉瓦塀等の設置に際してこうした風習が行われていたことを示す事例としてきわめて重要な発見となりました。

このたび見つかった鍾馗面を刻んだ煉瓦は、明石市立文化博物館のロビーで4月19日(日)まで展示し、その後、4月22日(水)から5月18日(月)まで明石市立二見図書館でも展示する予定です。今後、採取した煉瓦の調査を進め、二見横河公園に残っていた煉瓦塀の歴史的意義付けを明確にしていきたいと思います。



- ・「横河邸敷地平面図」（1985年頃作成カ、個人所蔵）を、もとに作成。
- ・内門の位置及び形状は「工事写真帳」（1985年12月、明石市所蔵）等をもとに加筆。





5 cm
0





